シルダビア

――黒ペリカンの王国――

数ある観光地の中でも、絵のような景色や外国のめずらしい風物を愛する旅行者たちをとりわけ魅了する国。今までは残念ながらあまり知られていなかったが、交通の便が悪く人里離れたこの小さな国にも空の定期便が乗り入れ、手つかずの美しい自然やよく知られた住人たちの手厚いもてなしぶり、近代化の歩みにもかかわらず生き続ける中世の風変わりな習俗などが、だれにでも身近なものとなった。

東欧の小国シルダビアは、首都クロウ（人口12万2千人）で合流するふたつの大河、ウラジール川と支流のモルトゥス川流域の大渓谷からなる。これらの渓谷は森におおわれた広大な台地と雪をいただく高い山々に囲まれている。シルダビア平原には麦畑と牧草地が豊かに広がり、地下にはあらゆる種類の鉱物資源が眠っている。大地からは温泉や硫黄泉がたくさんわきだし、中でもクロウ（心臓病に効く）とクラゴニェディン（リューマチに効く）のものは有名。

総人口は推定64万2千人。輸出品は小麦、薪、馬、クロウ産のミネラルウォーターなど。ヴァイオリニストをよく輩出する土地柄でもある。

シルダビアの歴史

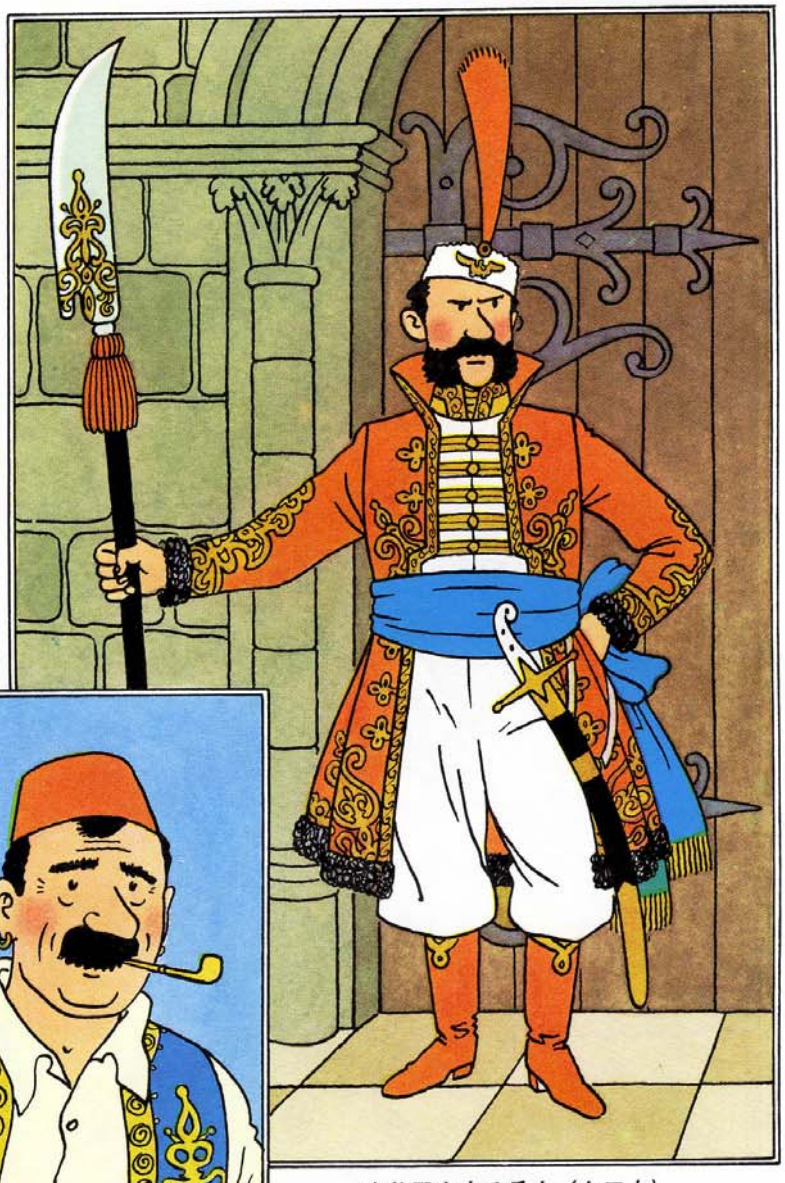
6世紀になるまで、シルダビアには起源のわからない遊牧の民が住んでいた。6世紀にスラブ族が侵入。10世紀にはトルコ人がスラブ人を山へ追いやり、平野部を占領した。

1127年、スラブ族の長フベギが有志の者を率いて山を降り、孤立したトルコの村々を襲ってはむかう者を皆殺しにし、またたくまに国の大部分を制圧した。

トルコ人の首都だったモルトゥス渓谷のツィレヘルムでは、トルコ軍とフベギの兵士たちの間で大規模な戦闘がおこなわれた。長い間の怠惰な暮らしで弱体化したトルコ軍は指導者たちも無能で、あまり長くは抵抗できず、大混乱のうちに敗走した。

トルコ人を追放したフベギは、王に選ばれて「ムスカル＝勇者（ムスクは勇敢、カルは王の意）」の名を与えられた。

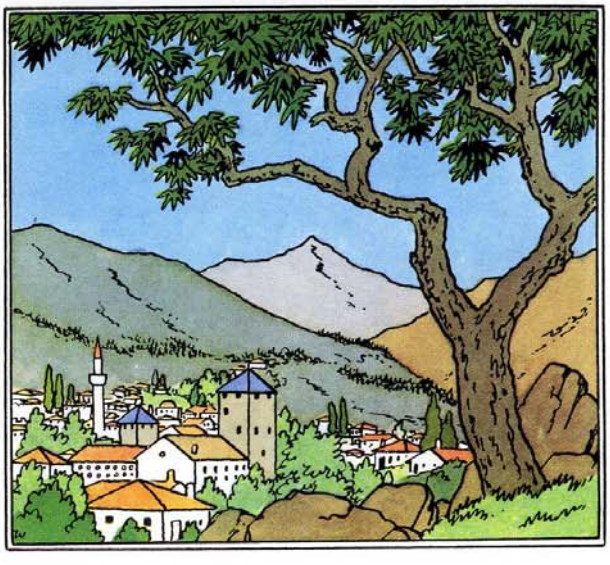
また、首都ツィレヘルムは「クロウ＝解放された町（クロホは解放、オウは町）」と改名された。



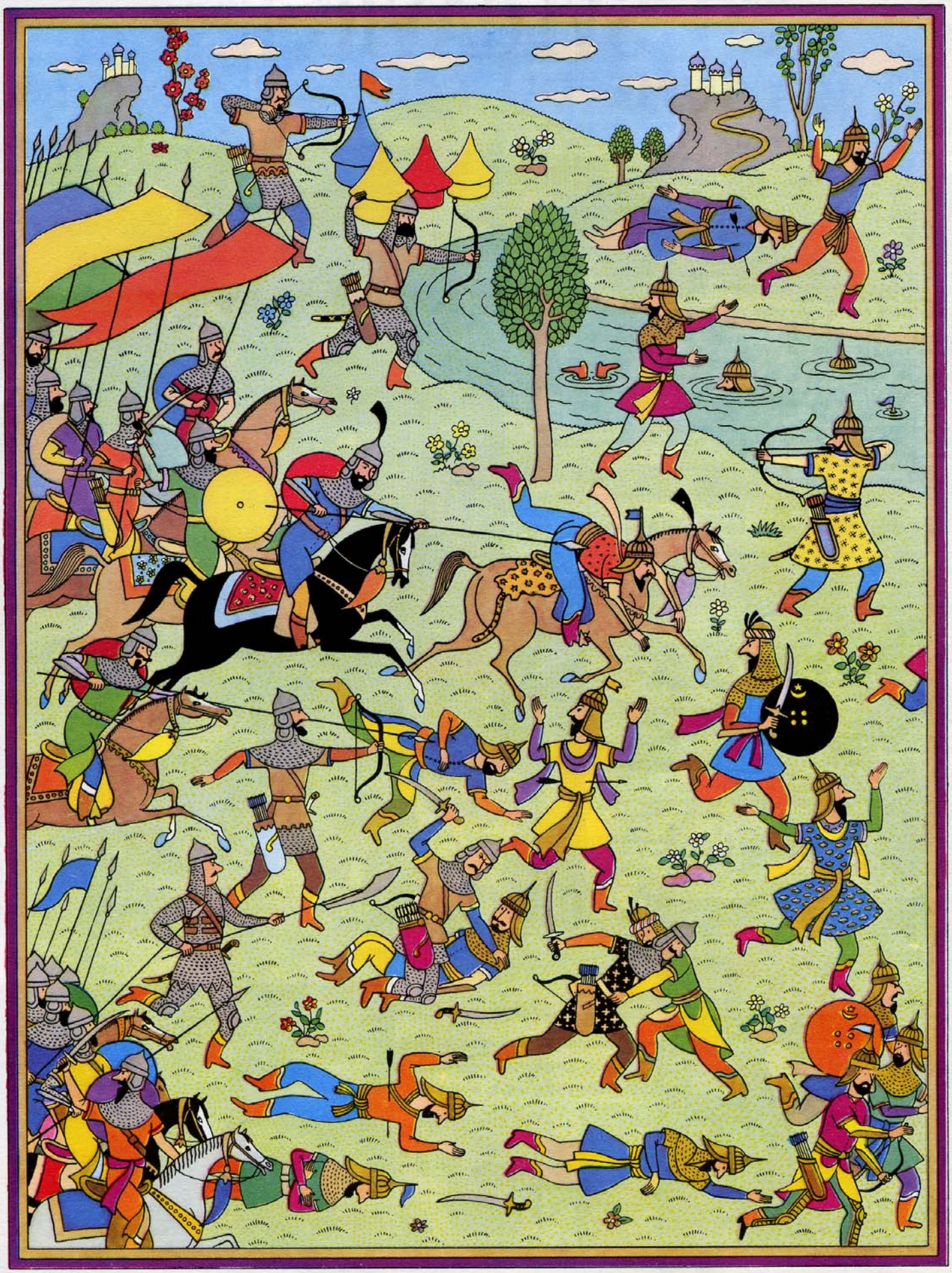
宝物殿を守る兵士（クロウ）

シルダビア南岸の漁師
（ドブロヌク）

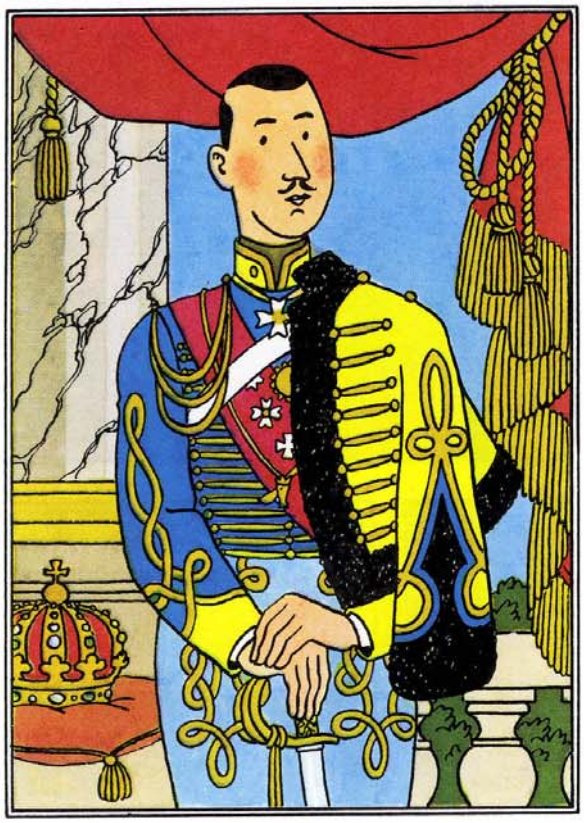
←市場へむかう農婦



ニェードロフからのながめ→
（ウラジール渓谷）



ツィレヘルムの戦い
(15世紀の細密画)



近衛兵の制服をお召しになった
シルダビアの現国王ムスカル12世

ムスカルは名君で、近隣諸国とも平和につきあい、国は大いに繁栄した。彼は1168年国中の民が嘆き悲しむ中、世を去った。長男が王位を継ぎムスカル2世となったが、父ほど力がなかったため、国の秩序を維持できず、やがて混乱の時代がやってくる。この機に乗じ、隣国ボルドリアの王がシルダビアに侵入、1195年シルダビアをボルドリアに併合した。

それから1世紀近くシルダビアはボルドリアの支配に苦しんだが、1275年アルマズート男爵がフベギの偉業にならい山から降りてきて、半年もたたぬうちにボルドリア人を追い払った。男爵は1277年オトカル1世（公爵からボヘミア国王になったプジェミスル・オタカルと混同しないこと）として即位したが、その権力はムスカル王よりはるかに弱く、ボルドリアとの戦いに協力した諸侯らに対して、英国王ジョン（失地王）のマグナ・カルタを手本にした憲章を結ばざるをえなかった。これが、シルダビアの封建制の始まりである。

オトカル1世は1298年に亡くなり、オトカル2世とオトカル3世があとを継いだ。その治世には特筆すべきことはないが、諸侯の力が強大化した時期としては注目される。諸侯たちはこぞって城の防備をかため、傭兵隊をやとって国王の軍隊に対抗した。

しかし、祖国の真の礎を築いたのは、1360年王位についたオトカル4世である。オトカル4世は、即位するとすぐ大規模な改革に着手。軍事力を高め、おごり高ぶる諸侯を鎮圧して財産を没収、全国を統一して内外の治安を安定させ、文芸、商業、農業などを保護して国にふたたび繁栄をもたらした。

シルダビアのモットーとなったあの名せりふを吐いたのもこの王である。その言葉の由来はつぎの通り。

ある日、オトカル4世に領地を没収された貴族の息子スタシェビッチ男爵がやってきて、主君にむかって恐れ多くも「シルダビアの王位をよこせ」と要求した。

オトカル4世は黙って聞いていたが、傲慢な男爵が最後に「杖をわたせ」と言って言葉を終えると、立ち上がって大胆不敵にもこう言いはなった。「ほしくば取りにこい！」

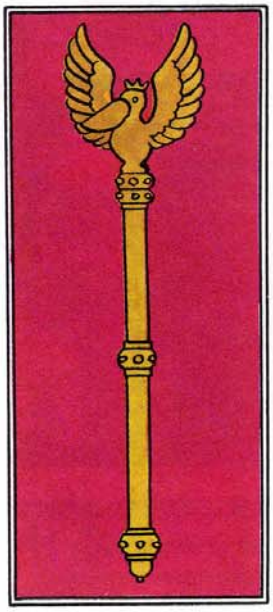
怒りくるった男爵は剣をぬき、家来たちが止めるまもなく襲いかかった。王はひらりと脇へとびのき、そのはずみによろめく敵の頭を杖でポカリと一撃、足元にたたきのめした。

その時叫んだ言葉が「エイベネク　エイブラベク！」。これは、シルダビア語で「君子あやうきに近よらず」というような意味である。そして、あっけにとられる人々をふりかえり、「思いよこしまなる者に災いあれ！」と言った。それから王は杖をじっとみつめ、さらにこんなことを口にした。「おお、わが命を救いし杖よ。汝今よりシルダビアの王権の最高の象徴となれ。汝を失いし王は不運なり。もはやこの国を統治するあたわず。」

この時からオトカル4世の後継者は、毎年聖ウラジミールの祝日に首都クロウを盛大に練り歩くこととなった。その手には、必ずあの由緒ある杖がにぎられている。杖をもたぬ王は、国を治める資格を失うのである。その行列を見送りながら、国民はあの名高い讃歌を歌う。

喜べ、シルダビアよ
この王はわれらが王
かの杖こそはその証

*



右：オトカル4世の杖
下：「オトカル4世武勇伝」（14世紀の写本）より